

ヨシュア記・士師記 通読



(3月30日)「士師記2:1~5」

こうしてこの場所の名をボキム(泣く者)と呼び、彼らはここで主にいけにえをささげた。
(士師記2章5節)

- ・イスラエルのそれぞれの民族が与えられた土地に入ったところで、主のみ使いから驚きの言葉が告げられます。「しかしあなたたちは、わたしの声に聞き従わなかった」と。具体的にはこういうことのようにです。
- ・「あなたたちはこの地の住民と契約を結んだ、住民の祭壇を取り壊さなかった」というのが、神さまの怒りの原因です。わたしたちにとっては違和感のある考え方ですが、この言葉を今も忠実に守っているキリスト教の教派があるのも事実です。
- ・仏壇やひな人形さえも、捨ててしまいなさいと言われていたときには、耳を疑ってしまいました。奈良基督教会の玄関横にはお地藏さんがいます。その教派の人たちがそれを知ると、ひっくり返るかもしれませんね。

(3月31日)「士師記2:6~15」

その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った。
(士師記2章10節)

- ・ヨシュアや、彼と共に神さまの不思議な業を見た長老たちは、みな亡くなっていきます。その中でイスラエルの人たちは、神さまの目に悪とされることをするようになってしまいます。「主のみ業」が伝承されていかなかったのです。
- ・イスラエルの人たちは、バアルとアシュトレトという異教の神々に仕えるようになってしまいます。この仕えるというのがどのレベルのことを言っているのかはわかりません。積極的にお供えをするのか、そこに像が立っているのを見て見ぬふりをしたのか。
- ・ただここで神さまは、怒ります。「わたしだけを見て!」と、まるで異性に対して束縛を求めているようにも感じます。旧約聖書では神さまが自分のことを「妬む」と言ったこともあります。それほどまでに民を愛しているということなのでしょう。

(3月1日)「ヨシュア記19:10~16」

カタト、ナハラル、シムオン、イルアラ、ベツレヘムなど十二の町とそれに属する村。
(ヨシュア記19章15節)

- ・三番目にくじを引いたのは、ゼブルン族でした。ゼブルンはヤコブの10人目の息子で、レアの六男です。ヤコブには、二人の妻のレアとラケル、そしてそれぞれの召し使いジルパとビルハとの間に全部で12人の息子が与えられました。
- ・そのうちレアとの間には6人の息子が生まれるのですが、ゼブルンはその末の弟ということになります。彼の名前は「尊敬してくれる(ザバル)」から付けられました。6人も息子を生んだのだから、夫ヤコブは尊敬してくれるに違いないと考えたのでしょう。
- ・そのゼブルン族が得たのは、ガリラヤ地方にあたる場所の南部でした。そこは未開拓の土地が多く、大きな町もなかったようです。ただ町のリストの中に、ベツレヘムがあります。イエス様のご降誕の舞台になった場所です。

(3月 2日)「ヨシュア記 19 : 17~23」

以上がイサカルの人々の部族が氏族ごとに受け継いだ嗣業の土地であり、町村である。

(ヨシュア記 19 章 23 節)

- ・続いてイサカルです。昔の聖書では「イッサカル」と表記されていたので、そちらの方が耳なじみのある方もおられるでしょう。イサカルはレアの 5 番目の息子です。そのため昨日登場したゼブルンとよく併記されます。
- ・彼らの母レアは、ヤコブに疎んじられていました。それはもう一人の妻である、レアの妹ラケルの方を愛していたからです。しかしその中で与えられた 5 人目の息子をレアは喜び、その名を「報酬 (サカル)」からイサカルと付けたのです。
- ・ただ地図を見ると、ゼブルンとイサカルの嗣業の地は、マナセやエフライムと比べるとずいぶん小さいようにも思えます。ゼブルンと共に、それほど重んじられていなかった部族だったのでしょうか。

(3月 3日)「ヨシュア記 19 : 24~31」

五番目のくじではアシェルの人々の部族が氏族ごとに割り当てを受けた。

(ヨシュア記 19 章 24 節)

- ・5 番目のくじは、アシェル族が引きました。アシェルはヤコブの 8 番目の息子で、レアの召し使いジルパが産んだ二人目の息子です。その名前は、「幸せなこと (アシェル)」から取られました。
- ・ヤコブは亡くなる前、「アシェルには豊かな食物があり 王の食卓に美味を供える。(創世記 49 章 20 節)」と祝福します。その言葉通り、アシェル族には地中海に面したティルスといった、豊かな土地が与えられたようです。
- ・またガリラヤのカナなど、新約聖書でイエス様の活動の舞台になった場所も含まれています。さらに被献日のときにシメオンと共に登場する女預言者アンナ (ルカ 2 : 36) は、アシェル族のファヌエルの娘です。いろいろとつながってきますね。

(3月 28日)「士師記 1 : 22~28」

その人はヘト人の地に行って町を築き、それをルズと名付けた。この町の名は今日に至るまでそう呼ばれている。

(士師記 1 章 26 節)

- ・22 節にある「ヨセフの一族」というのは、聖書地図には出てきません。ベテルはエフライム族に与えられた場所ですので、マナセとエフライムを合わせて「ヨセフ族」と表現しているのかもしれませんが。
- ・聖書の記述の中に、「カナン人は住み続けた」、「カナン人を追い出さなかった」、「カナン人はその中にとどまり」というものがあります。ユダヤ人がこれを読むと、苦々しい歴史になってしまうのでしょうか。
- ・しかしわたしたちから見たら、「後から来ておいて、それは当然だ」、「もっと仲良く共生すればいいのに」と思います。「民族主義」という旧約聖書の一面向が、ここに色濃くあらわれているようです。

(3月 29日)「士師記 1 : 29~36」

アシェルはこれらの地の住民であるカナン人を追い出さず、彼らの中に住み続けた。

(士師記 1 章 32 節)

- ・「強制労働」という言葉が目につきます。昔エジプトのピラミッドは奴隷が強制労働させられて造られたという説が一般的でした。しかし現代では、建設に携わる職業の人の手によって建てられたという説が有力です。
- ・それはともかく、イスラエルの人々はエジプトの地で、強制労働によって苦しめられてきたという歴史があったはずで、その労苦に耐えられなくなって神さまに対して叫び、モーセによってエジプトから脱出したはずなのですが。
- ・イエス様が語った言葉、「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(マタイによる福音書 7 章 12 節)」を思い出します。奴隷から解放された喜びを、他の民族とも分かち合っしてほしいところで。

(3月 26日)「士師記 1: 1~11」

ヨシュアの死後、イスラエルの人々は主に問うて言った。「わたしたちのうち、誰が最初に上って行って、カナン人を攻撃すべきでしょうか。」

(士師記 1 章 1 節)

- ・今日から士師記に入ります。士師記は英語で「Judges」と訳され、ジャッジする人、つまり裁き主という意味合いを持ちます。ただ同時にイスラエルの民を正しい方向へ導く人や治める人でもあります。
- ・この士師記もヨシュア記同様、戦争の場面が多く出てきますし、神さまがお怒りになることも多々あります。そのためにどうしても、敬遠されがちな箇所になります。ただ現代のイスラエルの状況を理解する上で、読んでおくのも大事なことでしょう。
- ・物語はヨシュアが死んだ後から始まります。ヨシュアはイスラエルのそれぞれの民族に土地を配分したものの、実際にはその土地には入っていなかったようです。まず 2 章 5 節までのところで、いわゆる「入植」の様子が描かれます。

(3月 27日)「士師記 1: 12~21」

ユダはガザとその領土、アシュケロンとその領土、エクロンとその領土をも占領した。

(士師記 1 章 18 節)

- ・12 節に出てくるカレブは、「エフネの子」と呼ばれていた人物でした。彼は出エジプトのときからいる二人のうちの一人居です。もう一人はヨシュアでした。カレブはヨシュアよりも長生きだったのでですね。
- ・カレブは自分が与えられた土地を占領した者に、娘アクサを与えると約束します。今このようなことを言うと、娘の人権はどこに？という話になるでしょう。ただこの時代には、「娘を強い男性に与える」ことは正しいとされていました。
- ・その土地を占領し、アクサを妻としたのはオトニエルという人物でした。彼はアクサを促し、ネゲブの地をもらいます。彼は後に士師として活躍していくこととなりますが、その様子は 3 章 7 節以降に描かれていきます。

(3月 4日)「ヨシュア記 19: 32~39」

以上がナフタリの人々の部族が氏族ごとに受け継いだ嗣業の土地であり、町村である。

(ヨシュア記 19 章 39 節)

- ・6 番目のくじは、ナフタリ族です。ナフタリはヤコブの 6 番目の息子です。ヤコブはレアとの間に 4 人の息子をもうけます。しかしもう一人の妻、レアの妹ラケルには、子どもが与えられませんでした。
- ・そこでラケルはヤコブに対し、自分の召し使いであるビルハのところに入るように求めます。そしてビルハはダンとナフタリという二人の息子を産むのです。どうしても姉に負けたくないという思いが見て取れます。
- ・「そのときラケルは、『姉と死に物狂いの争いをして (ニフタル)、ついに勝った』と言って、その名をナフタリと名付けた。(創 30: 8)」とあるように、ラケルの執念によってナフタリは生まれました。そのナフタリ族の嗣業の地を中心に、イエス様は活動するのです。

(3月 5日)「ヨシュア記 19: 40~48」

しかし、ダンの人々は領地を奪われた後、北上し、レシエムを攻めてこれを占領し、剣をもって住民を撃ち、そこを手に入れて、そこに住んだ。彼らは、先祖ダンの名に従って、レシエムをダンと呼んだ。

(ヨシュア記 19 章 47 節)

- ・最後の 7 番目のくじは、ダン族が引きました。昨日の箇所でも触れたように、ダン族はラケルの召し使いビルハが産んだ子で、ヤコブの 5 番目の息子です。この子の名前を付けるときに、ラケルはこのように言います。
- ・「わたしの訴えを神は正しくお裁き (ディン) になり、わたしの願いを聞き入れ男の子を与えてくださった (創 30: 6)」。またダン族は、「道端の蛇 小道のほとりに潜む蝮。馬のかかとをかむと 乗り手はおおむけに落ちる。(創 49: 17)」とヤコブに預言されます。
- ・その言葉の通り、ダン族は嗣業の地にあったレシエムを攻めて、それを占領します。そしてそこに住み、その地をダンと呼ぶのです。蛇や蝮のような狡猾さで、敵を落としてしまうのです。

(3月 6日)「ヨシュア記 19: 49~51」

境界線を定めて、土地の嗣業の配分が終わると、イスラエルの人々は自分たちの土地の中からヌンの子ヨシュアに嗣業の土地を贈った。

(ヨシュア記 19 章 49 節)

・ヌンの子ヨシュアは、エフライム族に属していました。そのためでしょうか、彼はエフライム山地の町ティムナト・セラを求め、その地が彼に与えられます。そしてヨシュアは、そこに町を建てて住んだそうです。

・彼の一番の働きは、約束の地に入ったイスラエルの人たちに土地を配分することでした。荒れ野を導いてきたモーセと、実際に土地に入り嗣業の地をそれぞれの部族に分け与えたヨシュア。

・神さまに与えられた働きがある程度落ち着き、ヨシュアには住む場所が与えられます。聖公会の牧師は定年になって働きを終えると、住む場所がなくなってしまいます。なんだかうらやましく思ってしまう。

(3月 7日)「ヨシュア記 20: 1~9」

意図してでなく、過って人を殺した者がそこに逃げ込めるようにしなさい。そこは、血の復讐をする者からの逃れの場所になる。

(ヨシュア記 20 章 3 節)

・神さまはヨシュアに対して、逃れの町を定めるように命じます。逃れの町については、民数記 35 章 6~34 節、申命記 4 章 41~43 節および 19 章 1~13 節にも書かれています。「故意ではない殺人」を犯してしまった人を、逃れさせる場所です。

・ただし逃れの町に避難した人は、そのときの大祭司が死ぬまでの間、そこに留まらなければいけません。またその人が逃れの町を出てウロウロしていると、被害者の遺族に殺されても文句は言えなかったようです。

・「故意」と「過失」、現代もその判断は難しいことがあります。飲酒運転や大幅なスピード超過で事故を起こしても「危険運転致死傷罪」が適用されることは珍しく、「過失運転致死罪」になることが多いです。「殺人罪」になることは、まずありません。

(3月 24日)「ヨシュア記 24: 29~31」

ヨシュアの在世中はもとより、ヨシュアの死後も生き永らえて、主がイスラエルに行われた御業をことごとく体験した長老たちの存命中、イスラエルは主に仕えた。

(ヨシュア記 24 章 31 節)

・ヨシュアは 110 年の生涯を終えました。彼とエフネの子カレブだけが、出エジプトからカナンの地定住を経験しました。いわゆる「生き証人」だったわけですが、ついに彼の命は尽きました。

・奈良基督教会は、来年創立 140 周年を迎えます。また 2030 年には礼拝堂聖別から 100 年になります。それまであった様々なことを後世に伝えるために、「記録」というものがとても重要になります。

・ヨシュアの在世中、そして死後も生きながらえた長老たちは、神さまのみ業を身をもって経験していました。神さまの愛も、そして怖さもよく知っていたのでしょ。彼らが生きている間は、民はきちんと神さまに仕えていたようです。

(3月 25日)「ヨシュア記 24: 32~33」

イスラエルの人々がエジプトから携えてきたヨセフの骨は、その昔、ヤコブが百ケシタで、シケムの父ハモルの息子たちから買い取ったシケムの野の一面に埋葬された。それは、ヨセフの子孫の嗣業の土地となった。

(ヨシュア記 24 章 32 節)

・創世記 33 章 18~20 節によると、ヤコブ (アブラハムの孫、ヨセフの父) はシケムの土地の一部を 100 ケシタで買い取っていました。100 ケシタがどれくらいの金額だったかは、よくわかっていないようです。

・ヤコブはそこに祭壇を建て、エル・エロヘ・イスラエルと呼びました。ヤコブはその直前の創世記 32 章 29 節で格闘をした神さまから、「お前の名はイスラエルと呼ばれる」と告げられたばかりでした。

・その場所に、ヨセフの骨は葬られます。ヨセフが死んで、どれくらい経っていたのでしょうか。しかし何年経っても、ヨセフの父ヤコブが買い取った場所にヨセフの骨を納め、そこをヨセフの嗣業の地としたかったのです。彼はそれほど、偉大だったのです。 13

(3月 22日)「ヨシュア記 24 : 11~18」

わたしは更に、あなたたちが自分で労せずして得た土地、自分で建てたのではない町を与えた。あなたたちはそこに住み、自分で植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑の果実を食べている。』 (ヨシュア記 24 章 13 節)

・ヨシュアはイスラエルの全部族の長老、長、裁判人、役人に対して語ります。それは「約束の地」に与えられた土地は、労せずして与えられた物だということ。そのことを、「自分で植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑の果実を食べている」と表現します。

・わたしたちは奉獻のときに、「すべてのものは神の賜物」と言います。しかしどうでしょう。「でも本当は自分で稼いだんだけどね」とは思っていないでしょうか。献金も「出してあげる」となっていないでしょうか。

・ヨシュアはその上で、イスラエルの人々に対して問いかけます。「あなたがたは誰に仕えるのか」と。ただ 16~18 節の民の言葉をみると、「~してもらったから、主に仕えます」という言い方に聞こえます。御利益宗教のようです。

(3月 23日)「ヨシュア記 24 : 19~28」

ヨシュアはしかし、民に言った。「あなたたちは主に仕えることができないであろう。この方は聖なる神であり、熱情の神であって、あなたたちの背きと罪をお赦しにならないからである。」 (ヨシュア記 24 章 19 節)

・たとえば子どもたちに、「みんなであの山、登ろうか」と言ったとします。しかし「うん、登る~!」、「頑張るぞ~!」という子どもたちに向かって、「いや、多分みんなは途中で諦めると思うよ」とか、「蛇や熊なんかが出たらどうするの」とか言うでしょうか。

・今日のヨシュアの言葉ですが、イスラエルの人々に対してかなり厳しい言葉を告げます。それはモーセやアロンが彼らを導いていたときも、イスラエルの人々は何度も神さまに背いたのを知っていたからです。

・民はヨシュアに対し、「わたしたちの神、主にわたしたちは仕え、その声に聞き従います」と宣言しますが、その後の物語を見ると、やはり、案の定、主に背いてしまいます。何だか自分の姿を見るようです。

(3月 8日)「ヨシュア記 21 : 1~3」

イスラエルの人々は、主の命令に従って、自分たちの嗣業の土地の中から次の町々とその放牧地をレビ人に与えた。

(ヨシュア記 21 章 3 節)

・ヤコブの三男であるレビから出たレビ人は嗣業の地を与えられませんでした。他の兄弟と違い、「レビ族」と呼ばれることもありません。ちなみに「レビ人」は「れびびと」と読みます。

・彼らは祭司の一族として、「主を嗣業(相続地)」としていました。そのため一族で継承するような土地は与えられませんでした。しかしそれでは生きていくことができないので、それぞれの部族の嗣業の土地の中から与えられることになったのです。

・ただ放牧地も一緒に与えられていることから、レビ人は祭司の働きだけをしていたわけではなかったようです。また家系も途絶えていないことから、婚姻なども普通にできていたことがわかります。

(3月 9日)「ヨシュア記 21 : 4~8」

イスラエルの人々はこのように、主がモーセを通して命じられたとおり、レビ人にこれらの町と放牧地をくじで分け与えた。

(ヨシュア記 21 章 8 節)

・出エジプトのときに活躍したモーセの兄アロンは、祭司でした。そしてアロンの子孫も祭司となっていきます。さらにレビ人はケハト、ゲルシオン、メラリの諸氏族に分かれていました。

・それぞれの氏族に対して土地を分配するのに、ここでも「くじ」が登場します。どのようなくじだったのか興味がありますが、棒のおみくじみたいなものかもしれません。それぞれの氏族に与えられた土地を見ると、かなり散らばっているのがわかります。

・ヨルダン川の東側にも西側にも、彼らレビ人は住むことになります。彼らは祭司職も、またその下働きも担っていました。どこにおいても「祭儀」は必要だったので、様々な場所に分かれて住んだということです。

(3月 10日)「ヨシュア記 21 : 9~19」

アロンの子孫である祭司たちの町は、合計十三であり、それに属する放牧地があった。

(ヨシュア記 21 章 19 節)

- ・まずケハトの諸氏族に属するアロンの子孫に対して、13 の町が与えられます。彼らはユダ族、シメオン族、ベニヤミン族から土地を得ました。聖書地図を見ると、ヨルダン川の西側の南部分です。
- ・そこにはベツレヘムやエルサレムなどもあり、これから先、中心的な働きがおこなわれる場所が与えられたこととなります。やはりアロンの子孫が入っているので、よい場所が与えられたのでしょうか。
- ・ただ彼らの氏族は、少なくとも 13 の場所に分かれて住むようになります。他の氏族との関係はよくわかりませんが、不安は大きかったでしょう。しかしそれが、「主を嗣業とする」ということなのです。まるで現代の牧師のようです。

(3月 11日)「ヨシュア記 21 : 20~33」

ナフタリ族からは、殺害者の逃れの町であるガリラヤのケデシュ、ハモト・ドル、カルタンとそれぞれの放牧地など三つの町である。

(ヨシュア記 21 章 32 節)

- ・その他のケハトの子らの諸氏族、ゲルシヨンの子孫にもそれぞれくじで、町が与えられます。その町の中に、「殺害者の逃れの町 (21、27、32 節)」が含まれていました。(昨日の 13 節、明日の 36 節にもあります)
- ・この「逃れの町」については、ヨシュア記 20 章に書かれています。故意ではない殺人を犯してしまった人が、その報復の手から逃げ込むための場所です。そこにいる限り、復讐することは許されませんでした。
- ・その町が、レビ人に与えられたということは、何を意味しているのでしょうか。祭司やレビ人といういわゆる「宗教者」に求められているのは、「ゆるし」と「いやし」という意味もあるのかもしれませんが。

(3月 20日)「ヨシュア記 23 : 14~16」

もし、あなたたちの神、主が命じられた契約を破り、他の神々に従い、仕え、これにひれ伏すなら、主の怒りが燃え上がり、あなたたちは与えられた良い土地から、速やかに滅び去る。

(ヨシュア記 23 章 16 節)

- ・ヨシュアが最後に語ったのは、因果応報ということです。因果応報とは仏教用語で、「過去の行いの善悪に応じて、必ずその報いがある」という意味があります。とても分かりやすい考え方です。
- ・ヨシュアのこの言葉にも見られるように、イスラエルの人々は良いことをしたら祝福(財産、長寿、子孫を得るなど)され、悪いことをしたら罰(病気、子どもができないなど)を受けるとされていました。
- ・しかしその考え方は、イエス様によって覆されます。あるときイエス様は、生まれつき目の見えない人に対して、それは罪の結果ではないと明言されました。人々を罪の呪縛から解放されたのです。

(3月 21日)「ヨシュア記 24 : 1~10」

わたしはモーセとアロンを遣わし、エジプトに災いをくだしたが、それはわたしが彼らの中にくだしたことである。その後、わたしはあなたたちを導き出した。

(ヨシュア記 24 章 5 節)

- ・いよいよヨシュア記の最後の章に入ります。まずヨシュアは、イスラエルの全部族をシケムに集めます。カナンのシケムという地は、アブラハムが神さまから語りかけられた場所です(創世記 12 章 6~7 節)。
- ・またヤコブはこのシケムの近くの土地を購入し、後にヨセフの骨を埋葬する場所とします(創世記 33 章 18~20 節)。さらにヤコブはこのシケムでそれまで民が持っていた外国の神々(偶像)を埋め、自分の家族を導きます(創世記 35 章 2~4 節)。
- ・このように、シケムはイスラエルにとって大きな意味を持つ場所でした。そこで今回ヨシュアは、イスラエルの人々を集めます。まず彼が語ったのは、アブラハムから始まった神さまの導きでした。

(3月18日)「ヨシュア記23:1~5」

見よ、わたしはヨルダン川から、太陽の沈む大海に至る全域、すなわち未征服の国々も、既に征服した国々もことごとく、くじによってあなたたち各部族の嗣業の土地として分け与えた。

(ヨシュア記23章4節)

- ・ヨシュア記も、あと2章となりました。イスラエルの各部族に土地が配分されてから、長い年月が流れたそうです。ここから、ヨシュアの告別の言葉が始まります。死期が迫ったことを感じているのです。
- ・ヨシュアはまず、すべての出来事は「あなたたちの神、主があなたたちのために」おこなったことだと語ります。わたしたち人間は何かを手に入れたときに、自分の力で得たのだと考えがちです。
- ・しかし、そうではないとヨシュアは語るのです。イスラエルの人たちの安住の地は、神さまの導きによって与えられたものだということです。わたしたちもこの考え方は、大切にしたいものです。

(3月19日)「ヨシュア記23:6~13」

あなたたちのうちに今なお残っているこれらの国民と交わり、その神々の名を唱えたり、誓ったりしてはならない。それらにひれ伏し拜んではならない。

(ヨシュア記23章7節)

- ・続いてヨシュアは、モーセの教えの書、つまり律法を忠実に守るように伝えます。「今日までしてきたように、ただあなたたちの神、主を固く信頼せよ」という言葉はわたしたちにも理解できます。
- ・しかしその前にある「あなたたちのうちに今なお残っているこれらの国民と交わり、その神々の名を唱えたり、誓ったりしてはならない。それらにひれ伏し拜んではならない」という命令はどう聞こえるでしょうか。
- ・日本においてキリスト教は、マイノリティです。それでも排他的に、他の宗教と一切交わらない教派もあります。わたしたちはどうでしょうか。他宗教でのお葬式やひな祭り、七五三など、どのように考えていくべきでしょうか。

(3月12日)「ヨシュア記21:34~45」

主が先祖に誓われた土地をことごとくイスラエルに与えられたので、彼らはそこを手に入れ、そこに住んだ。

(ヨシュア記21章43節)

- ・最後にメラリの人々にも、氏族ごとに町が与えられました。これでレビ人の町は全部で48になりました。彼らレビ人は、祭司職を担ったり、その下働きをしたりしていました。つまり、祭儀に携わっていたのです。
- ・そのために、各氏族に与えられた嗣業の地に彼らは分かれて住むことになります。各地に神社があり、そこに氏子がいるようなイメージでしょうか。これでレビ人にも無事、土地が配分されました。
- ・イエス様の時代、レビ人はどうしていたのでしょうか。彼らはルカによる福音書10章25~37節の「善いサマリア人」に登場します。そこでレビ人は、強盗に襲われ倒れていた人を見て、道の向こう側を通って行きました。あまりよい描かれ方はしていません。

(3月13日)「ヨシュア記22:1~8」

彼らに言った。「多くの財宝、多数の家畜、金、銀、銅、鉄および数多くの衣服を天幕に持ち帰りなさい。敵から分捕った物は、兄弟たちと分け合いなさい。」

(ヨシュア記22章8節)

- ・ルベン人、ガド人、マナセの半部族はヨルダン川を渡らず、その東側の土地に住むことを選んでいました。しかし他の部族が西側の土地を得るまで、一緒に行動していました。自分たちだけが危険な場所から逃れるわけにはいかなかったからです。
- ・西側の土地の配分が終わったとき、ヨシュアは「あなたたちは主の僕モーセから受けたヨルダン川の東側にある自分の所有地の天幕に帰るがよい」と命じます。ようやく安住の地に戻れるのです。
- ・家族を東側の地に残し、兵士として西側での戦いに加わった人も多くいたことでしょう。しかし中には命を落とし、家族の元に戻れなかった人もいたと思います。いつの時代も、戦争は嫌なものです。

(3月14日)「ヨシュア記22:9~14」

イスラエルの人々は、ルベンとガドの人々、およびマナセの半部族がカナンの地境、ヨルダン川のイスラエル側のゲリロトに祭壇を築いたとの知らせを聞いた。
(ヨシュア記22章11節)

- ・ヨルダン川の東側に戻ったルベン人、ガド人、マナセの半部族は、ゲリロトに祭壇を築きます。そのことは西側に土地を持つ人たちとの争いを引き起こします。祭壇くらい、とはならなかったのです。
- ・出エジプト記20章24節には「あなたは、わたしのために土の祭壇を造り、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物、羊、牛をその上にささげなさい」と定められているので、祭壇は自由に作れそうも思います。
- ・しかし申命記12章5節には「必ず、あなたたちの神、主がその名を置くために全部族の中から選ばれる場所、すなわち主の住まいを尋ね、そこへ行きなさい」とあるので、祭壇の場所は全部属で定める必要があったのです。

(3月15日)「ヨシュア記22:15~20」

それなのに、お前たちは今日、主に背こうとしている。今日、主に逆らうなら、明日、イスラエルの共同体全体に御怒りが下るであろう。

(ヨシュア記22章18節)

- ・申命記12章5節にあるように、ヨルダン川の東側の三部族だけで祭壇を築いたことは主に背いていると、西側の部族の人たちは考えました。そこで軍を差し向けようとするのですがその前に、祭司ピネハスとそれぞれの家系の長を遣わします。
- ・17節にある「ペオルで犯したあの罪」については、民数記25章に書かれています。バアルという異教の神々を拝んでしまったイスラエルの民を、神さまが厳しく罰した出来事です。彼らは、祭壇を築いたことで同じ怒りが下されると指摘します。
- ・そしてその怒りは、祭壇を築いた東側の人たちだけではなく、イスラエル全体に及ぶだろうと言うのです。そのようなことにならないように、軍を差し向けて怒りの原因を消そうというのです。

(3月16日)「ヨシュア記22:21~29」

ルベンとガドの人々よ。主はヨルダン川をわたしたちとあなたたちとの境とされた。あなたたちには、主の割り当てはない』と言って、あなたたちの子供がわたしたちの子供に主を畏れることをやめさせるかもしれません。

(ヨシュア記22章25節)

- ・22節の「神よ、主なる神よ。神よ、主なる神よ。神はご存じです。イスラエルも分かってください」という叫びが、ルベン人、ガド人、マナセの半部族の人々の思いをあらわしています。
- ・彼らの心には、決して主に背こうという思いはありませんでした。ただ「カナンの地」に住むことになった自分たちがアイデンティティを保つために、祭壇が必要だったということを訴えるのです。
- ・その祭壇は主の祭壇とは違い、そこで焼き尽くす献げ物などをするのではないと彼らは宣言します。それは模型であり、西側の人との間柄を示すに過ぎないということです。それほど川を隔てることに、恐れがあったということでしょう。

(3月17日)「ヨシュア記22:30~34」

イスラエルの人々は、このことを良しとし、神をたたえ、もはやルベンとガドの人々の住む地方に攻め上り、これを滅ぼそうと言う者はなかった。

(ヨシュア記22章33節)

- ・ヨルダン川の東側に祭壇を築いた問題は、軍や兵士を使うことなく解決したようです。何かのためになると思って行動しても、その目的などを誤解されてしまい、トラブルになることがあります。
- ・あとで聞いてみると、「あれ、同じこと考えていたんだ」と気づくこともあるわけです。やはり話し合いつつ、とても必要なことですね。争いの多い旧約聖書の中で、平和の内に解決する出来事があるとホッとします。
- ・ルベンとガドの人々は、この祭壇を「わたしたちの間では主が神であることの証人」(新しい翻訳の聖書では「私たちの間で、主こそが神であることの証し」と名付けました。今もこれほどどこかにあるのでしょうか。